

アルパック ニュースレター 地域計画・建築研究所



大阪城公園駅からみたOBP。左の白い建物はホテルニューオータニ、
右の白い建物が大阪事務所のあるブラザビルです。

アルパック ニュースレター もくじ

・デザイン博・その後(下).....	2
・変わる「全国植樹祭」.....	4
・美方町(兵庫県)ふるさと運動の5年.....	6
・過疎に挑む「生涯学習のまち」.....	7
・活気のまちかど博多編.....	8
・ネットワーク通信⑧「方丈有理の会」.....	9
・アルパックの大阪事務所は変わります.....	10
・新刊旧刊書評紹介.....	11
・まちかど.....	12

NO. **41**

デザイン博・その後（下）

名古屋事務所長 尾関 利勝

テーマとローカルな個性が面白さをつくるデザインと言うテーマを選び、出展者がこれに応えようと努力した結果、同時期の他の大都市の博覧会が概ね共通してハイテク映像に集中し、ともすれば似通った企業展示が多くなる傾向の中で、名古屋のデザイン博の展示は比較的オリジナリティーが高く面白かったと言う評判を耳にしました。特に外国館の展示は全体のボリュームがそう多く無かったにもかかわらず、アメリカ・ヨーロッパ・東欧・アジアと世界の各地域のデザイン関連製品等が一通り網羅され、それぞれのデザインの特徴・姿勢を見ることができて、好感が持てるものでした。敢えて言えば、これに応える日本のデザイン・名古屋のデザインが何か、良く読み切れなかったのがデザインをテーマとしたこの博覧会の弱点だったように思います。この点でより明確なメッセージを持つべきテーマ館の展示が、宇宙船などのインパクトの強い見世物に食われ（それ自体は面白い展示だったが）、日本と名古屋のデザインの明確な主張が今一つ弱かったように思いました。一方で企業展示では巨大映画館の集合遊園地と言う印象を受けた中で、地場系企業の展示ではデザインをテーマとしたコンセプトづくりに努力の跡を感じさせるものが幾つかありました。

ちなみにこの間並行して行なわれた横浜博と福岡を比べて見ますと、横浜では港に関連した展示・ショップが横浜らしく楽しさを感じさせてくれましたし、福岡ではアジア太平洋をテーマとしていたため小型大阪万博のよ

うな雰囲気でしたが、ウォーターフロントのトロピカルなイメージが大変印象的でした。これらの例から、地方博を面白くする方法の一つは他の地域にはないその地域の特色を判りやすく表現すること、あるいは明確なコンセプトに裏付けられたテーマの選択とその確かな表現の努力にあるように思いました。

まちのアメニティ向上に一役買った

デザイン博

市内3会場に分散する会場設定は、元々主催者の中で市内全体を博覧会場に、そして会場とともに市内を楽しんでもらおうと言う、言わば欲張った、あるいは観光接待のホスピタリティー的精神から出てきたものです。このため会場設営以外に、会場周辺、都心、名古屋駅、金山駅周辺の集中的整備、地下鉄6号線の建設に合わせた出入口のデザイン、主要なバス停のデザイン、若宮大通高架下の公園整備、都心の電線地下埋設、市内主要カ所のライトアップなどが博覧会準備と並行して進められました。さすが名古屋は金持ち都市と思われるかも知れません。確かにこの時期に集中投資が行なわれたのは事実なのですが、特別の投資だったかと言うと必ずしもそうではなく、元々それぞれの事業の下敷きがあり、個々に並行して進められていたものが、デザイン博を目標に、多少お駄賃を余計にもらって一斉に整備されたと言うのがより正確な表現でしょう。

「名古屋が奇麗になったね」「アメニティが高くなったね」と言うのが、最近名古屋を訪れる人の大方の反応です。よほどアメニテ

ィの低い都市と思われていたのでしょう。それもこれもデザイン博を一つの契機として集中的に整備した結果です。都市環境の整備は本来時間をかけてじっくり進めて行くものと考えていますが、時にはこのようなピークをつくることも変化と効果を目に見えるものにする意味で重要な役割があると感じました。デザイン博は会場とそこでのイベント以外に名古屋のまちの活性化、とりわけ都心における歩行者環境整備とライトアップによって都市の夜の魅力づくりに大きな貢献をしました。

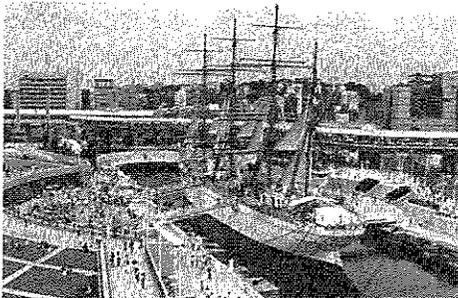
ところでデザイン博にろくな協力もしなかったアルバック名古屋ですが、市内のライトアップの方針づくり、会場周辺(港と城)、都心、名古屋駅、金山駅、市役所のライトアップ・デザイン方針づくりなど都市環境のアメニティ向上作戦を多少お手伝いいたしました。

ホットな市民参加が多ければ、

祭りをもっと面白くなる

名古屋の市制百周年はデザイン博に尽きると言っても過言ではない状況でした。しかし、一方で百年と言う市制の節を市民がこぞって素直に祝う機会が残念ながらほとんど無かったのも実状です。ごく単純に誕生日をお祝いする位の軽い気持ちで市民が参加できる場面があったとしたら、デザイン博への関心も、入場者数も、もう一回り多かったでしょうし、批判的なマスコミ報道も少なかったのではないかと思います。

MM 21 横浜博

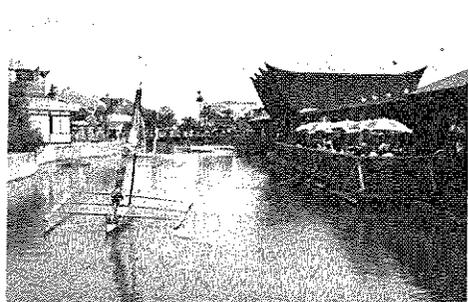


少なかったとは言えるものの、デザイン博がらみの市民参加は幾つかありました。デザイン博を盛りあげる「やろまい」(あわおどり風のパフォーマンス)、商業団体による「金しゃちロボット」パレード、市制百周年を機に名古屋城本丸御殿の復元をめざす「金しゃち連」、博覧会港会場の地元の人々によるデザイン博期間に焦点をあてたイベント「宝島共和国」などの市民運動がありました。残念ながら一部にかぎられ、市民全体に大きく広がるには至りませんでした。これからの地方イベントには、そのベースに市民参加をもっと重視すべきではないかと感じました。

これからの都市環境の

デザイン向上のために

ところで、デザインをテーマに都市を考えると、これから社会的ストックとして都市環境デザインをどう高めていくか、だれがそれにかかわるかと言うことが大きな課題になってきたと感じています。名古屋の場合、行政が都市景観に取組み始めて10年、ようやくその成果がデザイン博を契機に見えてきたと言うところでしょう。都市環境とりわけ公共空間のデザイン水準は全国的にグレードアップしてきています。しかし使われる素材は随分上等になってきましたが、トータルなデザインはまだちぐはぐで、時に目を覆いたくなるような状況もあります。都市環境デザインの分野では、行政にも、コンサルタント・設計よかとびゃ トロピカルなイメージの飲食街



デザイン博 地元、築地地区「宝島共和国」
イベントのパレード風景



事務所にも、教育機関にもデザイン・スペシャリストがあまりに少ないと言うことが問題です。都市環境のデザインの現場では、土木・建築・造園・インダストリアル・デザインなどの様々な立場の人が、時々・処所・思い思いに参加している状況が実状です。結論と

してベースは教育になると思います。都市のシステムを背景として、総合的に都市環境づくりを理解し、現場の技術や管理にも精通した都市環境デザインのスペシャリストを育てるのに、本気で官産学が考えなければならぬ時に来ていると思います。

デザイン博後に名古屋市や愛知県、地元財界でデザイン・センターをつくる動きが高まってきています。市制百周年事業が時代へのこすものとして、デザイン博を開催した名古屋が都市環境のデザイン向上にむけて、先進的な役割を果たしていくこと、そのためのムーブメントを起こしていくことが期待されます。(おぜき としかつ)

変わる「全国植樹祭」

山田 泰造

はじめに

京都では2巡目初回を飾った「京都国体」が63年成功裡に終了し、その興奮もさめやらぬ平成3年5月には全国植樹祭が行われます。毎年各府県持廻りで開催されるこの2つの大会には両陛下が御臨席になり、全国から多数の関係者が参集する極めて大規模な大会です。そこで全国植樹祭の今日までの経過と「緑でうめたい 地球の未来」をテーマにして行われる第42回全国植樹祭について概要をのべることにします。

全国植樹祭

戦争により荒廃した森林の復興のため愛林行事を行うこととなり、昭和22年現在の林業試験場浅川実験林で東宮殿下をお迎えして記念植樹が行われました。ついで23・24年には東京都・神奈川県で両陛下の御臨席のもと記念植樹があり、これを機に国土緑化運動の中心的行事として25年(社)国土緑化推進委員会と山梨県が共催で「第1回植樹行事及び国土緑化大会」が発足、45年からは「全国植

樹祭」と名称を変更して今日に至りました。この大会は第1回からテーマを設定していますので、テーマがどう変化したのかを見ることにします。

- 第1回 25年 山梨県 荒廃地造林
- 第5回 30年 兵庫県 せき悪林地改良
- 第10回 34年 埼玉県 林種転換
- 第15回 39年 長野県 入会野林の造林推進
- 第20回 44年 富山県 低質広葉樹の高度利用と拡大造林
- 第23回 47年 新潟県 県土保全と緑ゆたかな環境づくり
- 第26回 50年 滋賀県 水と緑のふるさとづくり
- 第28回 52年 和歌山県 みんなで育てる緑の郷土
- 第32回 56年 奈良県 文化の遺産を緑でまもる都市づくり
- 第37回 61年 大阪府 都市の未来を緑に託して

第42回 平成3年 京都府 緑でうめたい 地球の未来

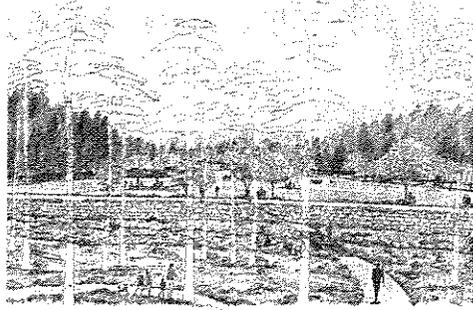
昭和20～40年代前半は各府県とも荒地や積雪寒冷地など地域の特性を課題として拡大造林、林種転換など直接生産増加につながる問題をテーマとしていましたが、40年代後半からは緑化、環境、都市との連関といったテーマに変化し、都市住民の緑化意識の高揚と林業への理解を深める方向に向いました。このことは63年に「緑と水の森林基金」制度を設け、200億円を基金として林業問題の調査研究や森林の市民利用促進を目的とした財団が設置されたことが、この間の事情をよく物語っています。また植樹祭の規模は年々大きくなり、関係者の輸送、宿泊所、行事事場など次第に懸案も多くなり、式典場所の選定についても各府県とも苦労しているようです。そして京都府で行われる植樹祭は始めて地球規模での緑化というテーマを掲げた大会となります。

第42回全国植樹祭の概要

京都府は第42回大会の愛称を「京都みどりの祭典」としました（以下祭典と省略）。その概要は次のとおりです。

- (1)場所……宇治市の山城総合運動公園太陽が丘に隣接した標高100m前後の丘陵（国有林）8.2ha。中央部の平坦地約3.5haを主要式典の会場に、周辺に日本庭園や花木を配置しています。
- (2)祭典の内容……過去最大規模の62年佐賀県大会と同規模の参加者15,000人により、恒例に従い両陸下による京都府の木・花のお手植、参加者代表による記念植樹、緑化功労者の表彰等が行われますが、その過程で京都らしい演出をいくつか加味するそうです。
- (3)祭典の特色……当日だけの祭典とせず、両3年にわたり各市町村で思い思いの行事を行い、祭典当日は太陽が丘で府民3万人の参加による「緑の文化展」を頂点として各地で多彩な行事を展開し、府民総参加の祭典とする

全国植樹祭会場イメージ図



会場内日本庭園



ことを目標としているそうです。

「京都みどりの祭典」を契機として

植樹祭本来の目的が深められることは勿論ですが、そのほかにまず最初に気になりになるのは会場の跡地はどうなるかということです。当然のことながら跡地利用は当初から十分に検討されてきましたが、現在のところ祭典終了後8.2haの会場は太陽が丘（100ha）と連端する一体的な公園緑地として多くの人々に利用、親しまれることになる予定です。最近の都市周辺の異常な地価上昇の中で、10haに近い緑地が創造されることは京都府民にとって非常に大きな贈物といえましょう。俄に公共投資の増額、特に公園、道路、下水道という市民生活に密着したものを重点として整備する施策が話題を呼んでいます。国民の「豊かさの実感」を求める要望に応える有効にして確実な手段といえますが、また本祭典を契機として全くタイミングよくその施策を先取りすることの意義も大きいものがあります。

（やまだ たいぞう）

美方町（兵庫県）ふるさと運動の5年

— ネットワークとしてのふるさと運動 —

藤田 武彦

ふるさと運動のスタート

最近よく美方町のことを思い出す。昭和59年の冬だったろうか。その年は大変な大雪であった。正直いえば名前もよく知らないまち、兵庫県北の美方町を初めて訪れた。

当時美方町は人口が3,200人ぐらいで、兵庫県一人口の少ない町だったように思う。主な産業は農業と酒造りの出稼、少し前に開業したスキー場による観光だった。役場で話をおうかがいしたが、実はあまりよく全体がつかめなかった。私にとってもまちづくり（総合計画）の仕事は始めてだったのである。

まちの問題ははっきりしていた。農業や出稼ぎの人の高齢化が進んでいたし、また若い人の定着も少なかった。そのため人口減少は将来もつづくように考えられた。しかし、この問題は急に解決できるものでもなさそうに思えた。解決できそうに思えなかったが、以後美方の人ととにかくたくさん話をした。1年半ぐらいの間に延べ100人以上の人と合って話をしたのではないだろうか。その経過で感じたのは、意外と町外の人とのつき合いを大切にしてきた経過がこの町にあるんだなあということだった。

初めて訪れて1年後美方町のつき合い拡大運動（ふるさと運動）がスタートした。当初、「こんなことやってもうかるのかいな」、「誰が世話するのや」といった声もあった。「別にすぐもうけになりません」と正直に言った。今考えると恐いもの知らずというか何というか、絶対頑張るの一念だった。ふるさとニュースもはじめ頃書かせてもらっていた。産物

についても、何か特産を入れたいということで、「肉のくんせい」に目をつけた。

丁度別件でやっていた仕事で、あるまちに小規模にやっているくんせい屋を見つけた。何故か毎日午前3時から仕事をするというので、その時間にいったインタビューしながら、目を盗んで漬け汁に指をつつこんでなめてみた。原価もきいてきた。今美方でそれは育ちつつある。まるでスパイやなあと思いつつもおもしろかった。いい思い出である。

ふるさと運動は当初から産物商いとは考えてなかった。とにかくいろんな人とつき合いを広げて、美方に関心をもってもらい、また町にきてもらいたかった。初年度目約300人の会員が今、500人ぐらいになっている。毎年75%は同一の人なので非常に定着率もよく順調である。開村式には120人ぐらいの人がくる。考えてみれば4人家族なら2,000人のふるさと人口がふえたことになる。

まちの何が変わったか

よくふるさと運動の効果についてきかれる。「町に新しい産業ができてねえ」とかいこう答を期待されているかもしれないが、もともとそのことを中心に考えていたわけではない。それより私は次のことに感動している。

- ・ふるさと会員の人からの便りが年々ふえている。
- ・産品をつくらせてくれという町内の人からの声が出てきている。
- ・こんなみやげがあったとあって、旅行先でみつけたものを役場にもってくる人がふえた。
- ・県内や他県でも出かけたとき、「私も会員なんです」という人に出合って話に花が咲く。
- ・あまり期待してなかったけど、春、夏にクラブ活



但馬ふるさと

小代ニュース

(平成元年現在会員数488名)

会員募集号外

発行 但馬ふるさと小代協会事務局
連絡 但馬ふるさと小代協会事務局
〒650-0001 尼崎市東通町1-1-1
TEL. 0984-93115

「但馬ふるさと小代」の自然とやさしさで
あなたの心と身体をリフレッシュ!!



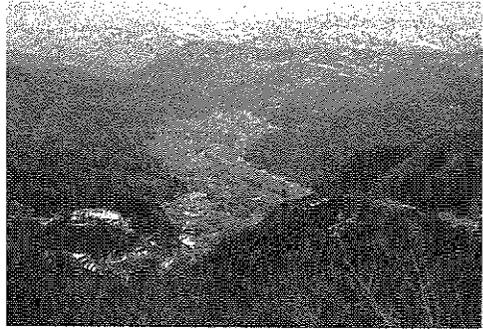
▲協会の人に話されるもちつき即売会

私達は豊かな自然と人々のふれあいを、意欲にあふれるのみなさまと平和だ
と考え、昭和50年に「但馬ふるさと小代協会」を設立させ、「ふるさと会員」制度が
スタートしました。昭和59年総会時から平成元年までの会員へとそれぞれの輪が
広がっています。私達は「ふるさと小代」が各員のみならず、ふるさ
との愛がさを実感していただけるまちづくりをいたしたいと考え努力しております。
平成2年度もみなさまの二人前を心からお持ちしております。

平成2年 新春

但馬ふるさと小代協会理事長(美方町長) 吉田 二 雄

美方町の春



但馬ふるさと 小あじろ代



No. 84

氏名

藤田 武彦



動とかでやってくる人がふえた。

- ・ 産品の一部をお歳暮に使いたいという申し込みがある。
- ・ 役場で他市町に出かけることがふえた。出ぶしよう解消のネタになる。(以前、本アルバックニュースレターで紹介した、尼崎市の潮江地区に雪をおくるなどもその1つの場面である。)
- ・ 以前からある子どもの自然教室も活発だが、加えて、3年前から外国人を含む地域交流のつどいもはじまった。

など、当初考えていた以上に、つき合いはふくらみ、まちの話題がふえたと思う。

今後どうするか

あれから5年経て、再び美方町のまちづくりを考える機会に恵まれた。この間まちは変わっていた。役場にも知らない若い人たちがふえ、ふるさと運動も新しい段階をむかえて

いた。ふるさと運動は、会員が当初にくらべて増加し、それへの新しい体制づくりが必要となりつつあるし、またより親密なふるさと会員とのおつき合いも今後の課題である。また、他の町から美方町に交流施設づくりの話もあり、ふるさと運動の第2期として、今後の5年を考えていきたい。

思えば、5年前「美方定住人口 3,000 人、ふるさと人口 3,000 人で人口を倍増しよう。」と役場の人と話し合ったことを思い出す。5年後本当にそうなるとは思わなかった。今後とも確かなつながりを築いていきたい。美方は春、山菜もうまい、鮎も楽しめる、是非足をお運び下さい。

(ふじた たけひこ)

きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況

過疎化に挑む「生涯学習のまち」

伊坂 善明

学歴社会の弊害や急速に変化する社会に対

処する人材の育成、あるいは長寿社会にむけて、国では学校教育だけではなく生涯にわたって学習を促進する生涯学習が施策のテーマとなってきています。そこで、ユニークな生涯学習活動を展開している1例を紹介します。

そこは、兵庫県の青垣町。過疎化に悩むこの町は、「心の過疎化」を克服することがまず大切と、心の若返りをするための生涯学習活動を展開しはじめたのが10年程前。国より一足早い。その後、昭和62年には生涯学習推進大綱を策定、63年には大府省「生涯学習モデル市町村」の指定を受けるとともに、「生涯学習の町」を宣言するなど、ますます活発に。そして、その独自の方式は「青垣方式」とも呼ばれ、全国の先進地としての評価を得ています。

中でもユニークなのが、53年から始めたと言われる「もじの里マラソン大会」。今では全国の26都府県から毎年3千人のランナーが集まります。ちなみに開催のために町が用意する予算の約5倍のお金が地元に着るといわれます。もうひとつは、62年より開催されている日本画展。日本画単独の全国公募展は、全国でもここだけ。都会の美術館でも1万人の観賞者を集めるのに苦労している中で、期間中に町外から約1万人の客を集めるまでになっています。

この町のユニークさは、こうしたとりくみも生涯学習としてとりくんでいる点です。「イベントは孤独な学習を活気づけてくれる。そのために開発したのが『イベントメニュー方式』。青垣町は、この方式で地域おこしをやっていく」と足立事務局長(青垣町公民館)は、言い切ります。上記のイベントをはじめ、6月から12月の180日間に32のイベントを開催し、住民はその中から自分の好みにイベントに参加するようにしています。

青垣町は、この蓄積をもとに、平成元年建設省の「生涯学習のむら」整備計画の指定を受け、都会の人々と交流しあえる「生涯学習のむら」づくりにとりくんでいます。

(いさか よしあき)

活気のまちかど博多編

「かもめ族の来るまち」

山辺 真一

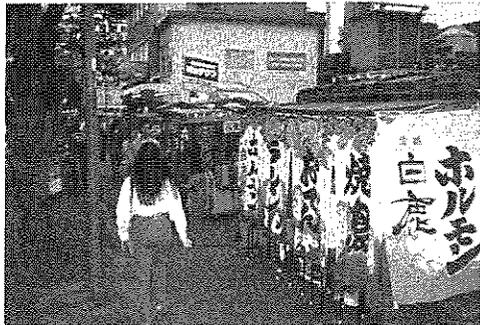
日曜日の朝10時、長崎方面からの特急電車「かもめ」が博多駅に到着する。電車のドアが開くと、中から大きなブランドもののバックを肩に掛けた若い女性が、次々と降りて来る。「かもめ族」の博多到着である。

昭和50年(1975)に100万都市の仲間となった福岡市の人口はさらに増加し、昭和63年(1988)には、120万人を突破し、いまや福岡都市圏の人口は200万人を超えようとしている。その結果、福岡の都心部では、イムズ、ソラリア、イル・パラッツォ、IM等、商業機能を中心とした都市開発が続々とその姿を現している。東京で流行ったものが、すぐに福岡で流行る、あるいは殆ど同時に流行るといような世の中になっている。

日曜日 朝9:19博多着「かもめ号」



屋台 午後18:00



博多でにぎやかなところと言えば、中州は不夜城とも呼ばれ、全国的にもその名は知られているが、ここは、若い人が戻ってきつつあると言うものの、若い女性には荷が重い。若い女性の集まるところに若者が集まるの法則のとおり、「親不孝通り」「天神西通り」そして、新生「マリアストリート」である。週末となれば、郊外から車に乗った若者が、この通りに集まり、深夜から朝方になるまで人通りの絶えることのないこのまちをうろついている。

昼間は、長崎、熊本、北九州、遠くは鹿児島からはるばるやってきた若い女性たちが、新しくオープンした商店を覗き、買物をし、雑誌に載ったしゃれた店で食事をして、満足げに帰って行く。

昨年の博覧会「よかトピア」もまだ記憶に新しく、その時の人の動きが、今だに続いているような錯覚さえ起こしそうである。

そして、若者たちだけでなく、老いも若きもをこのまちに引き寄せる魅力は、むしろ古くからある博多の魅力と言われる「屋台」ではないか。

天神のビル街の中に、夕方4時頃から、屋台があちこちの路地裏から引っ張り出されて来る。早朝から夕方まで路地裏で休んでいた体を、まるで準備体操をするように、波滞する車を横目に大通りをユラユラと移動していく。夜の博多のまちのにぎわいの主役の登場である。

韓国の屋体と違って、立ち喰いはほとんどなく、寒いときには簡単な壁が付けられ、暖かくなるとのれんだけという姿である。さすがに雨のひどいときには出していないこともあり、また日曜日は休みというところが多いが、天神のオフィス街の通りで、ビルの中に人の気配がなくなると屋台に人がいる。業務ビルばかりのまちで屋間の人通りとうって変わって、あちこちの屋台からは、にぎやかな声が年中響いてくる。

福岡のまちは、まちそのものに昼と夜の表情があり、主役が交代する。まちのにぎわいが深夜まで続く。アーバンリゾートという言葉が本当にあるならば、このまちこそが、その名に値するまちではないだろうか。これからもずっと、このにぎわいが続くことを願ってやまない。

(やまべ しんいち)

ネットワーク通信⑧

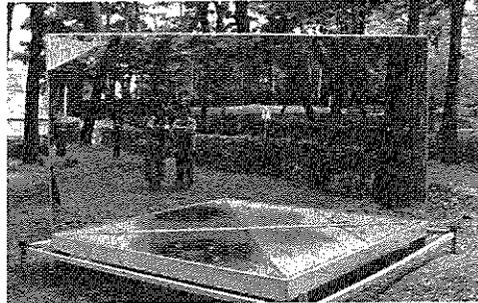
「方丈有理の会」

道家 駿太郎

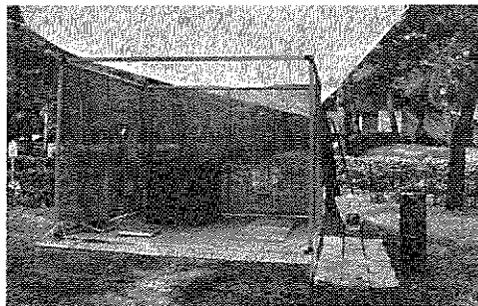
鴨長明の住居は、「方丈記」にあるように1丈(3メートル)四方の住居ですが、この中で寝食、創造、瞑想の三要素を全て成立させた住居の基本型としても完全なものです。

今や世の中は、飽食・資源浪費・地球汚染など生活秩序の枠組が消えそうになっています。

「方丈有理の会」は、京都に住み、京都を愛する都市計画、建築設計、工業デザインなどのデザイナーの集まりで、新しいデザイン緑の中に立てかけた鏡の前に立つと……。



「方丈」の住居を再現したもの



運動にとりこんでいます。

その心は、方丈の中から見いだされる「凝縮」と「簡素」と「共生」の視点から、暮らしに生きる道具、気候風土に合う住宅、人間のための都市などの提案を行っていきたいと考えています。

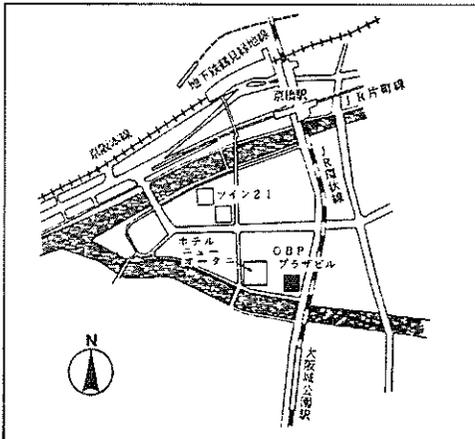
先日は、相国寺境内にて屋外美術展を開きました。緑深い松林と満開のサクラを借景に7点の作品を展示しましたが、お寺の境内での展外展ということで関心を集めることができました。（どうけ しゅんたろう）

連絡先：㈱G K京都内連絡事務局
075-211-2277（富家・恩地）

アルバックの大阪事務所は
変わります
大阪事務所長 杉原 五郎

アルバックの大阪事務所は、このたび天満橋からOBP（大阪ビジネスパーク）に移転することにしました。天満橋の事務所（天満橋千代田ビル2号館）には、1978年8月から1990年4月まで約12年お世話になりました。

大阪事務所は、これまで大阪に根をおろすことを目標しつつ、近畿圏を中心にコンサルタント活動を活発に展開してきましたが、本年4月には、新入所員6名を迎え、3つの計画部、1つの計画設計室に総務部門を加えて新しい大阪事務所の位置



総勢30名の規模となりました。事務所スペースも手狭まになり、年々高度化する業務ニーズへの対応という点からも事務所活動に支障が生ずる事態となりました。こうしたことから、事務所環境の改善と新たな社会的要請の高まりに対応するため、事務所移転を決意致しました。

新事務所は、大阪城公園に隣接し、大阪の新しい都心として注目を浴びているOBPの一角にあります。周囲は緑とオープンスペースが多く、アメニティは市内でもとくに高い所です。また、新事務所として入る住友生命OBPプラザビルには、いずみホールがあり、文化的な環境も申し分ありません。仕事に疲れた時には、音楽を聞いたり、大阪城公園を散歩したりすることができ、業務環境が飛躍的に向上するものと期待しています。

21世紀を迎えるこれからの10年。世界と日本の経済社会はさらに大きく揺れ動き、地球も都市も地域も劇的な変化をまねがれません。グローバル化、情報化、高度技術化、ソフト化、高齢化、成熟化等といった社会的潮流も顕著となり、プランニングコンサルタントやシンクタンクに対する要請もさらに高度化・多様化することが予測されます。また、新たな課題の発見や具体的な解決策の提案などが強く求められることとなりましょう。

アルバック大阪事務所としましては、多くの顧客の皆様との信頼関係を大事にしつつ、アルバック全社との連携を強めながら、先端情報の受信・創造・発信に努めてまいりたいと考えております。お近くにおいでの際には是非お寄りください。またこれまでにもまして暖かいご支持とご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

（すぎはら ごろう）

新大阪事務所
住所 〒540 大阪市中央区城見1-4-70
住友生命OBPプラザビル15階
TEL 06-942-5732 FAX 06-941-7478
（電話、FAXは以前と同様です）

新刊旧刊書評紹介

編集：丹波総合開発促進協議会
 協力：地域計画建築研究所
 発行：丹波の森協会

「丹波の森」

紹介 小阪 昌裕

十年一昔、その一昔前のころ、京都伏見の自宅を起終点として自転車で京都盆地を脱出して近畿を自転車であまわっていました。

北はJR山陰本線沿いから若狭湾、西は旧東海道沿いから伊勢湾、南は奈良盆地から紀ノ川河口、東は老ノ坂越えの丹波篠山まで。

丹波篠山への道

道中最初の難関、息も絶え絶えになった峠がその名も「老ノ坂峠」、ここが丹波と山城の国境、さらに西へ田園地帯を通過して少し登りを感じたと思っていると、いつしか下り坂になり篠山の町へとはいつてしまいました。かつて、篠山まで福知山線の篠山口駅から分岐して篠山線がきていたそうですが、今は道路となつてしまいその面影はありません。そこから、福知山線沿いに南下し、だらだらした長い坂を登りきって宝塚方面へ出たのを覚えていてます。

丹波の魅どころ

そんな思い出のある丹波の地を今回改めて見直したり新しい発見をしたりして、感激したものの一部をあげると……

・グルメの里：マツタケ、ボタン鍋、栗、黒大豆

・日本一低い中央分水界の里：もし、海面が100m上がれば本州が丹波で二分される！

・自然・歴史・文化の里

森のホール、森の植物館、森のレストラン、陶器の里等と呼ぶにふさわしい諸施設

本書の構成

本書は、丹波の里（兵庫県丹波地域10町）を対象地とした「行政委託報告書もの」としては少ないと思われませんが、「丹波の森宣言」で始まる「縦書き・ですます調」、地域の小学校校歌も載せた郷土読本的なものです。ごくありふれた日本のふるさとを思い起こしながら浸りたい方、一読をおすすめします。

第1章 森のくに丹波

第2章 森に生きる丹波

第3章 丹波の森の理念

第4章 森づくりのために

第5章 森づくりのやくわり

第6章 森づくりの展開

「丹波の森」のリードイメージは、かの有名な「ウィーンの森」。入手されたい方は、限定版？ですのでアルバック小阪まで御一報ください。（こさか まさひろ）

丹 波 の 森 宣 言

丹波の自然と文化は、現在及び将来にわたる住民共有の財産であつて、これを維持発展させる

ことは私たちに課せられた重大な義務です。

今、私たちはこの義務を強く自覚し、お互いに

力を合わせ、自然や文化を大切にしながら、

これらを生かした「丹波の森」づくりを

次のように進めることを宣言します。



1 丹波の健全な発展をそなへようとする

自然破壊は行わず、

森を大切に守り育てます。

2 丹波の自然景観を大切にし、

花と緑の美しい地域づくりを進めます。

3 丹波の文化景観及び歴史的遺産を

大切にし、個性豊かな

地域文化を育てます。

4 丹波の素朴さと人情を大切に、

安らぎと活力に満ちた

地域づくりを進めます。

昭和63年9月1日

まちかど

O B P かいわい記

藤田 武彦

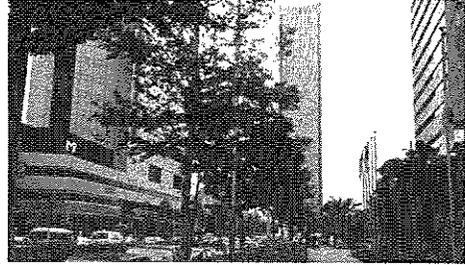
私共の大阪事務所がO B Pに移ります。ご承知かもしれませんが、開高健が「日本三文オペラ」に書いている「アパッチ村」こそかつてのO B Pの姿です。これまで戦後の風景を多分に引きずって、「立ち飲み屋」と「ラブホテル」のイメージのある京橋が変わろうとしています。

O B Pができて、京橋の飲み屋が少しはきれいになってきたなあと思っははいましたが、とても若い人や家族があつまるような雰囲気にはなってなかったように思います。しかし「花と緑の博覧会」に関連して京橋にも地下鉄が入り、その駅周辺整備も進んできました（コムズカーデン）。またO B Pの「インターナショナルマーケットプレース」のオープン、京阪電鉄のモール再開発等相次いで、これだけやれば客も街も変わるのかと実感しました。大阪にきて、仲間で立ち飲み屋で飲んでいるとき、大阪の東の玄関として京橋のポテンシャルは感じてましたが、どうも従来のイメージにひきずられた意見が多かったよう

です。今後もっと変りうる街だと思います。たのしみにしています。

(ふじた たけひと)

O B Pのメインストリート(左はインターナショナルマーケットプレース)



地下鉄京橋(コムズカーデン)



京橋の飲み屋街



アルパック (株)地域計画・建築研究所

ARCHITECTS, REGIONAL PLANNERS & ASSOCIATES, KYOTO

本社	〒600	京都市下京区四條通り高倉西入ル立売西町82 (大和銀行京都ビル8階)	TEL (075) 221-5132(代) FAX (075) 256-1764
大阪事務所	〒540	大阪市中央区城見1-4-70 (住友生命OBPプラザビル15階)	TEL (06) 942-5732(代) FAX (06) 941-7478
名古屋事務所	〒460	名古屋市中区丸の内3丁目18番30号 (ツボウビル2階)	TEL (052) 962-1224(代) FAX (052) 962-1225
東京事務所	〒402	東京都港区芝大門2-3-14 (一松ビル1号館402)	TEL (03) 437-3405(代) FAX (03) 437-3407
九州地域計画研究所	〒810	福岡市中央区天神1丁目15番1号 (日之出ビル6階)	TEL (092) 731-7671(代) FAX (092) 731-7673
(株)アルパックインターナショナル	〒540	大阪市中央区石町1丁目1番1号 (天満橋千代田ビル2号館9階)	TEL (06) 943-7016 FAX (06) 943-7026
佛都市居住文化研究所	〒604	京都市中京区御池通東洞院東南角 (京ビル4階)	TEL (075) 252-2231 FAX (075) 252-2282